

ふたないエルフ



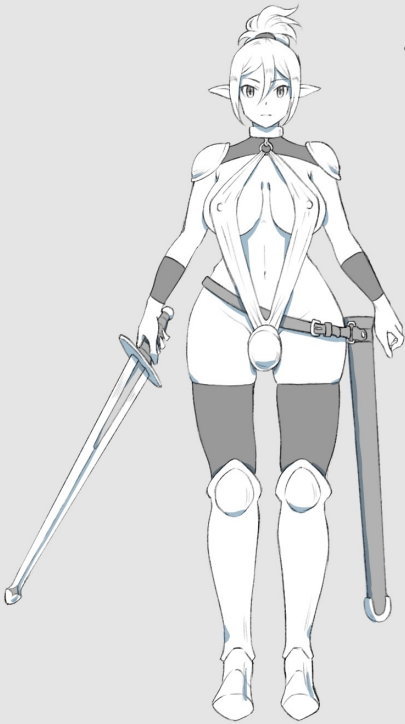
爆乳シスター

♡ 秘密の懺悔室 ♡

\*ご注意\*

- このコンテンツは成人向けです。未成年の方が閲覧することはできません。
- この中で描かれる事件・人物・その他の物はすべてフィクションです。

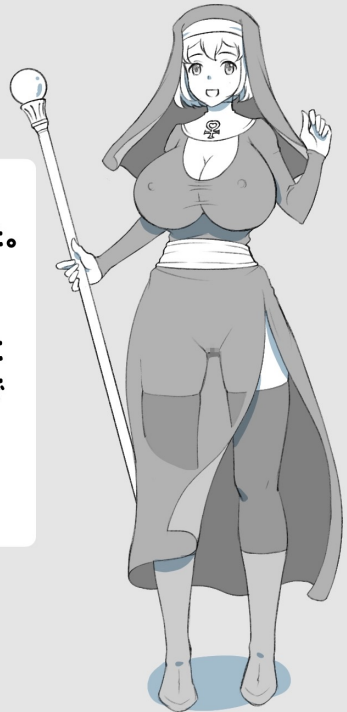
## ★クリル



女神エローラの加護を受けられた**狂聖**戦士。子作りのために里を離れ武者修行の旅に出た。胸の大きさのわりに実力がなくレベルが上がらず悩んでいた。やむを得ず淫乱なエローラに願掛けし無敵のエロ戦士になる。が、そのせいでふたなり巨根になってしまう。生真面目だが性欲は人一倍激しい。自覚はないが可愛い女の子が大好き。フレヤに一目惚れし、うっかり性の悩みを打ち明けてしまう。

## ★フレヤ

女神に仕える修道女。爆乳の持ち主でセクハラに悩んだ末に隠遁した。お人よしを絵に描いたような性格で誰にでも優しく接する。しかし、本人は自覚していないが性欲が非常に旺盛で、名器の持ち主。禁欲的な生活で今まで抑えられてきた。ふたなりエルフ戦士クリルに出会い一目惚れ。彼女の願いを何でも叶えてあげようとする。



——  
ここではないどこか。

——  
過去であり未来でもある時代。

その島は、エルティアと呼ばれていました。

西の果ての海にある不思議な島。

聞くところによると、かつて栄え、一夜にして滅んだ、アトランティス大陸の一部だとか。

そこでは不思議なことも当たり前のようにありました。

そしてエッチなことも…

今夜はそんな夜伽話のひとつです。

♡ 目次 ♡

1・痴女…ではなく、エルフ戦士あらわる

2・女戦士の悩み（ペニスご開帳）

3・お口でご奉仕♡（手コキ・顔射・フェラ・イマラチオ）

4・おっぱいはいやらし…じゃなくて、癒し♡（乳揉み・乳クンニ・陥没乳首・乳首責め・母乳・イマラチオ）

5・腋は性器♡（ワキガ・腋クンニ・腋マンコ）

- 6・お尻の聖域♥（尻揉み・尻クンニ・膣クンニ・膣手コキ・アナルクンニ・アナル開発）
- 7・アソコの神秘♥（初挿入・処女喪失・変則立ちバック・中出し）
- 8・アナルは必然♥（アナル挿入・アナル射精）
- 9・子作りは最後の試練♥（後背位・騎乗位・背面駆弁・種付けプレス）
- 10・そして呪縛はご褒美なのです♥（駆弁・ボテ腹）

あとがき

7・アナルは必然♥

8・腋は性器♥

9・子作りは最後の試練♥

10・そして呪縛はご褒美なのです♥

あとがき

1・痴女…ではなく、エルフ戦士あらわる

その小さな教会は、深い森の中にありました。

森に守られるようにひっそりと建つそこには、訪れる人もあまりなく、一人のシスターが住んでいました。

その尼僧の名は、フレヤ。

まだ歳若く純情な少女です。

熱心な信者で、女神エローラを奉<sup>たてまつ</sup>るこの古びた教会を守ろうと、健<sup>た</sup>気ががんばっています。

あどけなく可愛らしい顔と、清楚な雰囲気を漂わせているのですが…ひとつだけシスターらしくないのは、その肢体でした。



特に胸が発達しています。修道服を押し上げる盛り上がりは、あきらかに不釣り合いで、そこだけなんだかいやらしいのです。

またそれとバランスを取るように、お尻も大きく、裾のスリットからのぞく太股もムツチリしていました。

とはいえ、シスターですから、性の経験はまだありません。

顔だけでなく心も純情なのです。

そんな少女がたった一人、神に仕えておりました。

今日も呑気に教会の前庭をお掃除していると

「…クヒヒヒ、噂ノトオリダ。乳ノでかい女ガイルト聞イタガ、本当ニでかいナ」

「アア。コレデ俺タチモ童貞ヲ卒業デキルゼ」

藪からワラワラと現れたのは、お約束のゴ布林軍団。

醜い顔とガニ股とメタボ腹の姿をした、殺られ役のモンスターです。

「黙レ！ 貴様、俺タチが嫌いぶ物デ大人気ナノヲ知ラナイノカ」

「オイ、何ヲヒトリ言ヲ呟イテイル」

「サツサトアノ尻ヲ犯ツチマオウゼ」

ということ、2、30体のゴ布林が尻僧さんを囲みます。

「…あら？ お客様ですか？ ようこそいらつしやいました。女神様へお祈りを捧げる方たちですね？」

事態が飲み込めないフレヤがニコリとします。誰にでも親切な娘です。

「女神ナンカくそ喰ラエ。俺タチ二用ガアルノハ、おまえダ」

「わたくしですか？ まあ、なんででしょう」

「ずばり言ウト、今カラおまえヲ輪姦スルノダ」

「『りんかん』？」

聴き慣れない言葉に首をかしげるフレヤ。

「林の間でナニかするのでしようか」

「違ウ、ソウジヤナイ。ヨツテタカツテぼろぼろニナルマデ犯シ、れいぶ妊娠サセテ性奴隷ニシテシマウノダ」

「せいどれい…とはなんでしよう？」

「…コイツ、随分ト世間知ラスダナ」

「性奴隷モ知ラナイトハ…今ドキノ娘ハコレダカラ」

「トニカク、俺様ノコノ逸物ヲブチ込ンデ、あへ顔ニサセテヤルカラ覚悟シロ」

ここぞとばかりに汚いパンツを脱ぎ、股間の黒ずんだ肉棒を晒しました。ゴブリンたちは人間よりも背が低いのですが、そのイチモツは人間と比べてもそこそこ大きいのです。

「ソラ見口！俺様ノまぐなむデハナ」

「サアサア、オマエモ脱グノダ」

ようやく意味がわかったフレヤは、慌ててイヤイヤをします。

「い、イケません。この体は女神様に捧げた身。あなたたちにズツコンバツコンされてグジグジュのドピユドピユ♥されるわけにはイカないのです」

「誰モソコマデ言ッテナイガ…」

「意外ニ知識ダケハアルノカ？」

「最近ハ処女デモ詳シイト言ウゾ」

「エエイ、感心シテイル場合カ！サツサト犯レ！」

「あ~~~~~れ~~~~、お助け~~~~~！」

「マタ古イ言イ方ヲスルナ…」

「—————そこまでだ！」

凜とした声が響きました。

颯爽さつそうと現れたのは、ひとりの女です。

フードを目深に被り、マントで体を覆っています。裾から剣の鞘がのぞいていました。その女は尼僧さんとゴブリンたちの間に割って入ると、フレヤを守るように仁王立ちします。

「か弱い女の悲鳴が聞こえたと思えば、ゴブリンどもの仕業か。とつとと消え失せろ、後悔しないうちにな」

「ナニヲウ!？」

「ケツケツケ、馬鹿メ、コノ手ノ話デハオ約束ノ『クツ殺』ダ!」

「クツ殺? それはなんだ」

「強イ女戦士ガ、本当ハトツテモ弱イごぶりんタチノ卑劣ナ毘ニ掛カッテ捕マリ、『クツ殺セ!』ト意地ヲ見セルモノノ、媚薬ヲ飲マサレ、ごぶりんノ執拗ナえつち責メニ『カ、感ジテナンカ:イナイ!』ト言イツツ、臭イちんぽヲ口トイワズまんこトイワズ尻穴トイワズ突ツ込マレ、最後ニハあへ顔ヲ晒シテ『ラメエエエ♥モット犯シテエエ♥ぐちやぐちやニシテエエエ♥』ト、懇願スル肉便器ト化スモノダ:フフフフ」

「オマエ…上手イナ！」

「実ハ日頃カラ練習シテイタ？」

「本当ハトツテモ弱イトイウトコロガ泣ケルナ…」

「——なるほど。そういう経験も興味深い」

同意するように女が頷きます。

「分カッタカ。分カッタナラ諦メテサツサト犯ラレ…」

「…だが、それにはまず、わたしと戦わねばならないが…倒せるかな、女神の戦士クリルを！」

バツ！——

マントを脱ぎ捨てると、そこには…！



「オオオ!!?」

「ナツ、ナンダコイツハ…」

「——痴女か!?!」

ゴブリンたちはどよめき、後ずさりしました。

と言いますのも、マントの下から現れたのは、よくある銀色の甲冑ではなく、とんでもなくハレンチな格好だったからです。

凛々しくもまだ少女の面影を残す美女。

健康的な肌は輝き、明るい赤毛と、深い翠色みどりの瞳。

全体的に引き締まった体つきで、手足はすらりと長く、腹筋はレリーフのごとく微かに浮かんでいます。おっぱいは標準よりも大きなGカップ。腰はキュツと縮まり、お尻はそこそこ大きめ。

ここまでではいいのですが…問題は、その衣装。



お約束のショルダーアーマーはいいとして、その下の、胴体の部分は、鎧というより：水着。ほとんどスッポンポンなのです。

股間と乳首をかるうじて覆うだけの鎧というか板きれ。乳首の周囲を保護するだけのプレートを革紐で結んでいます。

股間はいわゆるV字型のボンテージ。ここも紐と覆いがあるだけで、なぜか大きな丸いキャップが付いています。

足はレザーブーツ。

これだけ。

お腹丸出しで防御力などどこにもないように見えます。

のみならず、この格好で歩くのは相当な勇気があるか、あるいは羞恥心がまったくないかのどちらか。

まさに防御力0の女戦士の典型なものでした。

「…ナナナナンダコノ裸ノ王様ハ!?」

「ソクナ格好デ恥ズカシクナイノカ!」

「オ父サンオ母サンハ泣イテイルゾ!」

「だつ黙れ! 誰も好きでこんな姿でいるわけでは…」

あまりのハレンチさにかえつてドン引きするゴブリンたちに、女戦士も顔を赤らめて反論しました。

「ア、一応自覚ハアルノカ…」

「ナントナク安心スルナ」

「この格好に恐れをなしたなら今すぐ退散するがいい」

「ニヤニオウ!? 勃起シタママふるちんデ帰レルカ」

「サツキ言ツタトオリくつ殺ニシテヤル!」

「———ならば仕方ない。成敗!———」



—— ザムツツツツツ！

劍風一閃、腰の劍が目にも留まらぬ速さで消えたかと思うと

—— ビュボッ！ ビュグルルッ！ ドバシヤアッ！！！

「アヘエエエエエ♥」

「いつクウウウウ♥」

「オホオオオオオ♥」

なんとゴブリンたちがいつせいに射精していました！

聞き苦しいアへ声を上げ、地面をのたうつて悶えています。股間のイチモツは触ってもいないのに大量の白濁液を撒き散らし、ムツとする悪臭を放って、辺りを汚します。

ゴブリンたちは腰をビクン♥ビクン♥引きつらせ、悶絶のすえ、ついに全滅してしまいました。あとには見る影もなくしおれた花のような縮んだペニスがあるばかり…そこを空つ風が揺らしてゆきます。

「…威力は知っていはが、はふがに凄いもろらは…」

女戦士が鼻をつまんでつぶやきました。この臭い空気はしばらく止みそうにもありません。

「恐るべひエクスタシー…いは、エキスカリバー…！」

手にしている剣を天へかざします。

その剣は奇妙な形をしていて、剣先が半円になっていました。見方によつては亀頭…いえいえ、気のせいでしょう。

「あ、あの。あひがほうごはいまひた」

やはり鼻をつまんでシスターが声を掛けます。

女戦士は彼女を手招きし、とりあえず臭いの届かない風上へ招きます。

「礼にはおよばぬ。乙女の危機とあらば、このクリル、命にかえても守りましょう」

「まあ…」

その格好はともかく、凜々しい態度に思わず胸キュン♥するフレヤ。それは巨乳ですか  
ら、キュン♥も大きかったです。

(…ハレンチなお姿でも、形の良いお乳といい、キュツと締まったお腰といい、逞しい腕  
といい、素敵な方ですね…)

女性というものをあまり意識したことのないフレヤですが、美しい顔立ちのエルフに見  
つめられると、ドキン♥とするものがあります。

「ですが、肉奴隷にされるところを助けていただいたのですから、せめてナニかお礼  
を…」

「む…」

今度はエルフがとまどう番です。

(…尼僧にしてはずいぶんと若くて可愛らしい…それに、服の上からでもはっきりと分かるこの胸のサイズは…こんな見事なモノは見たことがない。それに、スリットからのぞく太股もまぶしく…脱いだらさぞや…)

ズキン♥

「うっ…！」

腰に疼きが走りました。思わず股間のキャップをおさえるエルフ。

(い、いかん。また悪い癖が…)

「まあ、どうなされたのですか」

フレヤが驚いてそこに触れようとするので、クリルは慌てて後ずさりました。

「な、なんでもない。ちよつとした刺激だ」

「しげき？」

「いや…その…なんというか…」

(可愛らしい娘だ…押し倒したくなる…いやいや、しつかりしろ！)

エルフ戦士はしばし葛藤しましたが、ついに低い声で言いました。

「…礼をしたいということだが…それはなんでもいいのか？」

「はい♪ 命以外ならたいいのことは。わたくしに出来ることであれば」

「そうか。…では、ちよつと相談に乗ってくれないか？」

「わたくしが？」

「うむ。無理強いはせぬ」

「まあ、そんな、相談事で大袈裟な…どうぞこちらへ♥」

(ついに言ってしまった…大丈夫だろうか)

いそいそと教会へいぎなう尼僧の後を追いながら、エルフの痴女…じゃない、女戦士

は、不安と期待を胸に秘めるのでした♥

後にはゴブリンたちの屍しかばねのようなものがゴロゴロ横たわっていました…(※あとで復活して森へ帰ります)。



## 2・女戦士の悩み

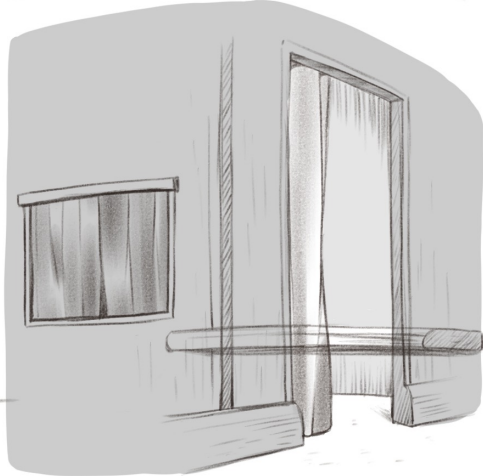
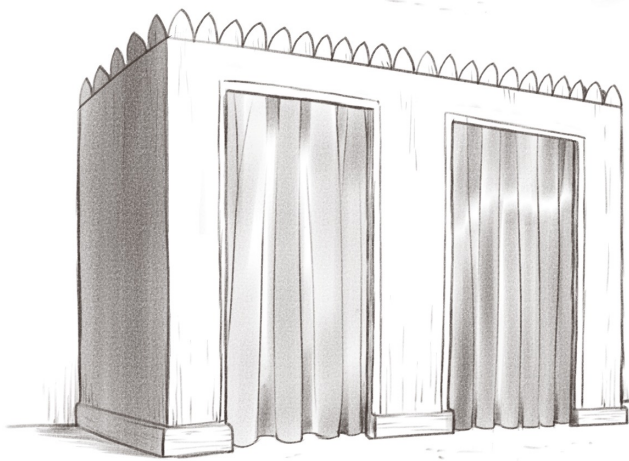
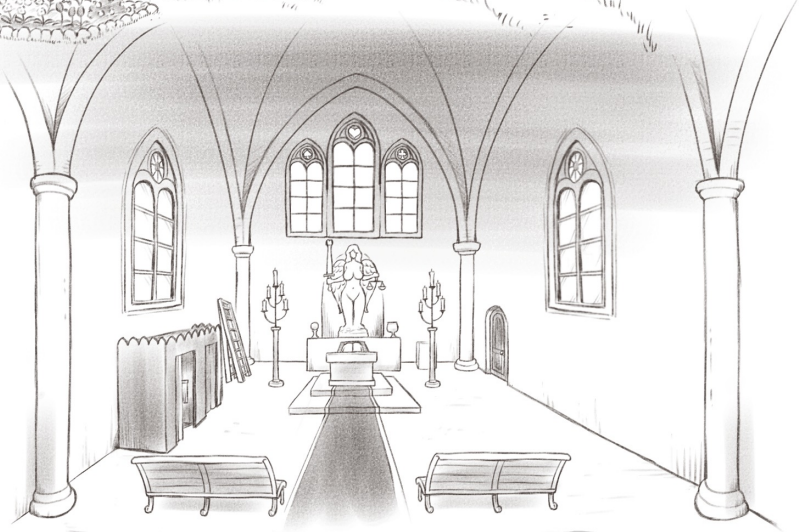
エルフ戦士クリルは、尼僧フレヤの案内で教会へ入りました。

そこは見た目よりも広い空間で、石造りの壁や柱で支えられています。奥の祭壇には女神エローラの神像が奉られており、あらわな乳房を晒すその姿が、厳粛な中にも一抹の卑猥さを漂わせていました。

「こちらです」

フレヤが導いたのは、木造の小さな部屋。告解室——いわゆる懺悔室です。

信者はこの中に入り、僧侶へ悩み事を打ち明けるのでした。



カーテンを引くと中は狭い箱になっています。真ん中に仕切り板があり、窓になる穴が開けられていて、そこもカーテンで閉ざされてしました。尼僧は一方の箱へ入り、エルフはもう一方へ入ります。

ベンチになる板がついているだけの簡素な小部屋。

(なるほど、これなら互いの顔を見ずにすむ)

女戦士は腰を下ろしました。

「…では、どういったご相談でしょう。お話をくださいませ」

カーテンの向こうからくぐもった少女の声がします。なんとなく神秘的で良い声だな…とクリルは思いました。

それから居ずまいを直し、しばらくためらった後、話を切り出します。

「実は…相談というのは他でもない。自分のことなのだが…」

「はい」

「…その、笑わないで聞いて欲しい。わたしには深刻な問題なので」

(笑う?)

あちら側でフレヤが小首をかしげます。が、ナニも言いません。

「それから、絶対に他言しないで欲しいのだ」

「ご安心ください。ここで告白されることは、すべてこのフレヤの胸の内に納めておきますから。尼僧として、信者の秘密を漏らすことは決していたしません」

真剣な声を聞くと、クリルはわずかに安心しました。

「——では話そう。」

自分は冒険者になって数年になるのだが、それなりに仕事をしている。

我らエルフ族はもともと子孫を得ることが難しく、たいいていの者は成人すると外へ出て修行をし、子供を授かって帰郷するのが常だ。だからわたしも村を出て冒険者になった。

…しかし、最初はとても苦労した。

はつきり言つて、わたしはあまり強くない。

訓練は怠らないが、素質があまりないらしく、弱いモンスターでもなかなか倒せない。

先ほどのゴブリンを相手にしても苦戦する始末で、レベルも上がらず、冒険者として恥ずかしい限りだった。

そういう者は高価な武器や武具を手に入れ、魔法のアイテムで補つてなんとかするのだが、わたしは貧乏でその日食べるだけがやつとだった。雑用をこなしたり、遠くの村へ届け物するのが主なクエストで、伝説のモンスターを倒したり、宝を手に入れることもない。

当然、うだつの上がないわたしを相手にする者もなく、子宝を授かるうにもセックスの相手もない始末だ。

悩んだ末、わたしは神の加護を得ることに決めた。

神の加護を得るということは、その神の僕しもべとなり、ミッションをこなさなければならぬ。だからどの神に奉仕するのか慎重に選ぶ必要がある。第一、神から援助を受けられる保証もない。

わたしはあちこちの神殿を訪ね歩いた。

正義の女神アストライア：武神アレス：風の神シルフィード：大地の神ノーム：海の女神リコリス：森の神バツコス：天空神レアトー：すべてダメだった。いくらお願いしても聞き耳を立てる気配すらなかった」

「おかわいそうに…」

思わずフレヤがつぶやきました。

「うむ…」

クリルもため息をつきます。

しかし、尼僧の同情に励まされ、話を続けました。

「これらの神々は人気が高く、信者も多い。だから多忙を極めるのだろう。わたしごときでは相手にされないのも無理はない。

そこで、もつとマイナーな神はいないかと探した。

酒場から酒場へ訪ね歩くと、エローラという聞いたことのない女神の噂を耳にしたのだ」

「その女神様ならと思ったのですね」

「うむ。…で、そのエローラ様のお噂なのだが…どうも微妙なのだ」

「微妙、とおっしゃいますと？」

「あまり言いたくはないのだが…とても、その、エッチ、というか…お盛んな方らしい」

「まあ…」

カーテンの向こうから微かに恥じらう気配。

「聞くところによると、女神エローラはかなりの好きもので、大勢の神々や魔族や人間やモンスターとまで交わるとのこと。なんでも1000年前の最終戦争でも神と魔王を相手に大変な活躍をされたとか」

「それは偉大な力をお持ちですね」

「まあ…たしかに力はあるが…」

歯切れの悪い口調。

「それで、エローラ様とは上手くいったのでしょうか？」

「う、うむ」

ためらいつつクリルは話を続けました。

「そこは山奥の洞窟の中にある寂れた神殿で、入り口の形が、なんとというか、じよ、女性器に似ている。そして奥へ続くトンネルもヒダヒダがあつて膣道の…いや、忘れてくれ。

それで女神像があつたので試しに祈ってみたら、あっさり現れた」



「なんと幸運な。わたくし、一度も神様にお会いしたことはありません」

「たぶん、あなたなら恥ずかしがると思う」

「どうして？」

「その…エローラ様は生まれたままのお姿で、何も着ていらつしやらないのだ」

「裸…ということですか？」

「まさしく。一糸まとわぬ全裸なのだ」

「あら…」

うぶなフレヤは顔を赤らめてしまいました。そんな彼女を見たら、クリルもきつとこの先を話すことはなかったでしょう。ですが幸か不幸か、相手の顔が見えないので、女戦士は気にせず話を続けました。

「わたしが話し掛ける前に、

『ナニが欲しいのかわかっていますよ』と、あのお方はおっしゃった。

あの方はとても豊満な体つきをしていて、人間よりも巨人に近いが、胸も腰も大きいのにスタイルが抜群で、肌はなめらかな真珠色に輝いている。少し宙に浮いているが、それだけでなく人間を超えた存在なのは明らかだった。

『久しぶりに訪れてくれた人間へのお礼に、あなたにふさわしいモノを授けましょう』

声が頭に響いてくる。聞く者の心をとろかすような甘くて誘惑的な声だ。それを聞くと

アソコが勝手に…失礼、」

「いいえ、お気になさらず。わたくし、これでも尼僧ですから。その…恥ずかしいお話でもかまいません」

「ありがとうございます。…で、その、つまり、エローラ様といるとなぜか欲情してしまって、ついあの方と…交わってしまったのだ」

「なんと…まさしく神に愛されたお方なのですな」

「『ずいぶんご無沙汰だから、たっぷり可愛がつてあげる♥』…とおっしゃられて。それで、よく覚えていないのだが、丸々二昼夜過ごしてしまつたらしい」

「そ、そんなに激しく…?」

「あまりにイキ過ぎて記憶があいまいなのだが…洞窟を後にして近くの村を訪ねたら、もう3日経つてると言われた」

「それで、女神様と目合まごあわれて、それからどうなったのですか」

「剣と鎧を授けられた。先ほどあなたも見たように、剣は『エクスタシィ・ソード絶頂剣』というのだが、恥ずかしいので『エキスカリバー』と呼んでいる」

「アノ剣ですね。どこかオチン…いえ、なんでもありません」

「そしてこの鎧…というか水着…というか、この衣装は『セクスパンダー性強化鎧』という武器らしい。どちらもある意味凄い性能なのだが…」

「あの、ぶしつけなようですが、風邪をお引きにならないのでしょうか？ お腹が丸見えですけれど」

「その点はまったく心配ない。どういう原理なのかわからぬが、コレを着ていると、いつも快適に温度が保たれている。酷暑の砂漠であろうと、酷寒のツンドラ地帯であろうと、

風邪を引いたことは一度もない。それどころか病気ひとつしないし、剣で斬られようが矢で射られようがたちどころに治ってしまうのだ」

「すばらしい武具なのですな」

「見た目が超絶恥ずかしいことを除けば、な」

その言葉に歯切れの悪さを感じ、フレヤはピンとききました。

「…もしかすると、まだ頂いたモノがあるのでは？ それで悩まれているような…」

「鋭いな。そうなのだ。」

エローラ様はたしかに伝説の武器・武具を授けられたが、そのかわりミッションをこなすよう命じられた。

『戦いによつて傷つき数を減らした者たちを再び増やすように』…

このようにおっしゃられ、それを達成するために…ある『モノ』をくださった、というか、押しつけられた」

「それはナニでしょう？」

クリルはしばしためらいました。

「…見たいか？」

「はい。それほど悩まれているのであれば、ぜひ拝見したく存じます」

「う〜〜〜ん……」

腕を組んでため息をつくエルフ。

…そして、やおら立ち上がり、

「では、大変失礼ではあるが…わたしの『悩みのタネ』をお見せしよう。

——それは『コレ』だ」



3・お口でござ奉仕♥

「なっ……………」

『それ』を見た瞬間、フレヤは絶句しました。

カーテンの間からヌウツと現れたのは…

とてつもなく大きなチンポだったからです。

まるで馬並み…長さときたらへソどころか鳩尾<sup>みずおち</sup>まで達しそろう。

太さは直径5センチ以上。

皮は完全に剥けておらず、仮性包茎で、亀頭の鈴口が皮の口から覗いていました。

隆々とした勃起はほぼ垂直に立ち、天井を睨んでいます。

色はそれほど黒ずんでおらず、エルフの明るい柔肌がやや日焼けしたような色。

皮膚の表面へ微かに血管が浮き、凸状に膨らんだ海綿体が逞しい筋を作っていました。

艶々と輝く怒張は、挑むように屹立しています。

「あ……あ………」

フレヤはすっかり圧倒されてしまいました。

それでなくとも性に関しては奥手なのに、いきなりこんなモノを見せられては、混乱するなと言うのが無理というもの。

ムアッ………



なんともいえない異臭が漂います。

極太ベニスから放たれるイカの干物のような臭い……

普通なら鼻が曲がるような臭さです。

「……ああ……♡」

……ですが、なぜかフレヤがその臭いを鼻の奥へ吸い込むと、キュウン♡と胸が締まるような、刺激的な香りがしました。

臭いことは臭いですが、決して悪くはない匂いです。

それに、なんだか体が微かに熱くなるような感じがします。

「こ、これは……その……見事なモノですね」

文字通り目と鼻の先へ突きつけられ、たじろぎながらもフレヤは目を離せませんでした。

クリルのチンポはそれ自体が生き物のようにピクリピクリと蠢うごめき、フレヤを誘うように揺れています。

「……醜いだろう？」

カーテンの向こうでクリルが自嘲しました。

「こんなモノが生えたおかげで、わたしは人前に出られなくなってしまった。チンポばかりではない。見てくれ」

さらに腰を前に出すと、カーテンから二つの丸い玉が現れます。

「あ。これは……えくと……辜丸こうがん、なるものでございますね？」

肉棒の根本にぶら下がっている玉は、それ一つが野球ボール大の大きさでした。並のサイズを遥かに超えています。

「この金玉があるせいで、股間にキャップを被せねばならぬのだ。まさか自分が男になるとは……」

それを聞いてフレヤは不思議に思いました。

「ですけど、お乳は大変大きくご立派で…どこから見てもクリル様は女性ですが」

「うむ。完全に男になったわけではない。その証拠に、女性器は残っている」

さらに腰を押し出すと、股を開いて、睾丸を手で上げてみせます。

その下には、なるほど、女の割れ目がしつかり残っていて、肉ビラを開いていました。

陰毛は永久脱毛で処理され、ツルツルピカピカのオマンコです♪

「まあ可愛らしい♥とつてもきれいなオマンコですね。…あ。す、すみません、はしたないことを…」

「いいのだ。むしろ汚いモノを見せてすまない。言葉だけでは分からないと思ったのでな」

「汚いなんて、そんな。すてきなチン…ええと、だ、男性器ではありませんか」

「ありがとう、気を遣ってくれて。」

こんなわけで、わたしは強くなったことはなつたが、戦いが終わると体が興奮して、勝手に勃起してしまうようになったのだ。

そうなるとコレが縮まるまで精を吐き出さねばならん」

「せい、とおつしやいますと」

「むろん精子のことだ。とても量が多くて、全部出すまでが大変だ」

「放っておけば鎮まるのでは」

「そういうわけにはいかない。試しに放置してみたが、半日経つても萎える気配もなかつた。第一、こうなると出したくて出したくてたまらなくなり、我慢などできるものではない」

「そんなにお辛いのですか…」

「笑ってくれ。散々苦勞して、やっと強くなったと思つたらコレだ。エローラ様を恨みはしないが、天罰を食らつた気分だ」

「コレはずつとこのままなのですか？」

「いや、ある条件を満たせば、元に戻れるそうだ」

「条件？」

「『女千人斬りを達成すれば女に戻れますよ』…だそうだ。つまり、1000人の女性とセックスしなければ戻れないのだ」

「まあ、そんなに沢山…大変ですわ」

「とはいえ、今まで一度も女と交わったことはない。その前に恥ずかしくて誰にもこんなモノを見せられなかったのだ。貴女あなたと出会うまでは…。おかしな話だろう。笑ってくれて構わない」

「いいえ、笑うだなんて。クリル様のお悩みは、わたくしも心苦しく思います」

純真な乙女は、生真面目に答えるのでした。

そんな彼女に、クリルはそこはかとなない好感を覚えました。

(なんとやさしい人だ。思い切って告白したのは間違いではなかったな)

「…いや、失礼した。こんなわたしの話を聞いてくれて。今すぐ引つ込め…」

「あのう、ぶしつけな質問ですが、精はどのように出されるのですか？」

「む、やり方か？ シゴクのだ」

「『シゴク』？」

「手で擦こすって出す。そうすると精が吐き出される。その後始末が大変なのだ。戦いの後な  
ど体が昂たかぶっているのも、もつと…」

「…こうやって？」

さわつ…

尼僧さんのほっそりした指が肉棒に絡みつきました。そのとたん、

「————うっ！？」

ビクン！と怒張が跳ね上がります。

驚いてフレヤは手を引つ込めました。

「あ、す、すみません！ 痛かったでしょうか？」

「い…いや、違…う」

ズキズキする腰の疼きに耐えながら答えるエルフ。

（触られた瞬間イキそうになってしまった…なんとという手触りざわ）

すべすべした指の腹がとてつもない刺激を生んだのです。

「その…気持ち良過ぎて…」

「まあ…」

フレヤも赤くなりました。

（殿方…じゃなくて、女性の方のオチンポを触るなんてはしたくない。でも…この方が気持ち良いというなら、続けた方が…）

「…あのう。もしよければ、もう少し擦りましょうか…？」

「えっ!？」

「クリル様がお嫌でなければ」

「嫌などどころか…しかし、シスターにそんな真似をさせるわけには」

「構いません。みなさんの苦しみを和らげるのが尼僧の使命です」

言うなり、再び手をそえるフレヤ。

「————ああああ♥♥♥」

カーテンの陰で女戦士が仰け反ります。

絡みつく乙女の指がやさしく、ゆつくりと、長大なペニスを上下に擦ってゆきました。

そのたびに上から下まで心地よい快感が湧き、腰が碎けそうになります。

「はあ…はあ…♥」

「クリル様、いかがですか？ 苦しくないですか？」

気遣う尼僧のやさしさがいつそう愉悦を煽ります。

「♥くはあ♥い、イイのお…♥ち、チンポいい…♥とろけそお…♥」

それまでの硬派な態度が一変し、女らしい嬌声が上がりました。本能が快楽を求め、自然と腰が窓へ押しつけられ、もつともつと肉棒を突き出していました。

「クリル様…可愛い方♥」



なんとはなしにフレヤはうっとりし、頬を赤らめました。無意識に小鼻が膨らんでいます。生まれて初めて男性器を触っているのに、嫌悪の情が湧くどころか、もつとじつくり触りたくなるのです。

（オチンポとはなんと素敵なモノなのでしょう…初めて見ますが、クリル様のオチンポはとつても遅しくて…なんだか可愛らしいのです♥）

尼僧はもつと悦ばせてあげようと、擦る手に少し力を込めました。ギュツ♥と太くて指が回り切らない肉棒を握ったのです。

「!? ああつ、はあああつ、だ、ダメええええ♥ 出ちやうからだめえええええ♥」

—— ビュバツ！ ビュビュツ、ビュウウウウウ！——

「—— キヤツ!?! ——」

突然先端から熱い白濁液が迸り、夥しい量を吐き出しました。顔面へまともに浴びた尼僧は目をつむり、軽い悲鳴を上げます。

「…うああつ！うつ！くううう！」

ビュルッ♥ビュルッ♥となおも顔射したペニスはやく止まりました。

「…はあつ！はあつ！はあああ〜〜〜♥」

震える体を支えつつ喘ぎます。

（…な、なんとという快感…♥少女の手がこんなに気持ちイイとは…♥）

わななく体を抑えるだけで精一杯。

一方のフレヤは、顔射された精液が顎を伝って滴り落ちるのも構わず、目を閉じたまま

震えていました。ムワッ♥と生臭い匂いが鼻腔を満たし、トロトロの粘液が流れる感覚が、とんでもなく心地よかったです。

（嗚呼…なぜでしょう。臭くって汚いはずなのに…とても…とても芳しい…♥）

そう…性フェロモンを浴びた尼僧は、自分でも気づかないうちに、激しく興奮してしまつたのでした。

「うう…♥す、すまない。汚してしまつただろうか？」

ようやく我に返つたエルフが声を掛けます。

フレヤは修道服の裾でゴシゴシ顔を拭つたので、なんとかきれいになりました。けれどもあちこちに拭い切れない精子の跡が残り、異臭を放っています。

「だ、大丈夫です。そんなに汚れては…まあ!？」

顔を上げた尼僧は驚きました。

なんと、肉棒は、前よりもさらに上を向いていたのです。

あれだけ吐いたというのに少しも硬さは衰えず、それどころか、なお大きくなっているようでした。

「あのう…コレ…縮まないの…でしょうか」

凶悪な怒張にいささか気圧されてしまいます。

壁越しにエルフは頷きました。

「うむ。情けないが、一度や二度では治らぬ。毎日10発は抜かないと鎮まらない。戦いがあった後などはもつと興奮して、20回射精だしたこともある」

「まあ…なんと逞しい」

エルフチンポの絶倫さに素直に感心するフレヤ。

「それでは、また擦ればよろしいのですね？」

「い、いや、そこまでシテいただけかなくとも…うっ！」

慌てて引つ込めようとすする肉棒を、すかさず尼僧が握り締めます。

「いいえ、一度も二度も同じこと。クリル様が楽になるまで、このフレヤがお世話をいたします」

きつぱりと言われるものですから、クリルはつい言つてしまいました。

「してくれると言うのなら、お願いしたいことが…」

「なんででしょう」

「その…す、すごく恥ずかしいのだが…実は、前から、女の人の口で…してもらいたいと……………」

最後の方は消え入りそうな声。

「お口でご奉仕するのですか？」

「う、うん…」

「どのようにすれば？」

性のことなど何も知らない尼僧は、アツケラカンと聞いてきます。

クリルはもう顔を真っ赤にして（でも壁越しだから見えませんが）、

「えと…し、舌で舐めたり…擦ったり…それから、口に含んで…舐め舐めして…欲しい

♡

「……………こんあふうひ？」

可愛らしいお口を開けて、尼僧は舌を出し、

「♡んはああああ♡し、舌ああああ♡気ん持ち…：いいいいいいん♡」

エルフ戦士が嬌声を上げます。その反応の激しいこと、よほど気持ちいいのでしょう。

(…コレを…こんな風…に♡)

鉄のように硬い肉レバーを無理やり押し下げ、たどたどしい舌つきで舐めてゆきます。

「んほおおお♡き、サオ、竿舐めてえええ♡根本から…先っぽん♡までえええ♡…そ、

そうよおお♡んじょうずうううん♡」

だらしなく口を開きながら、クリルは少女の舌心地に酔い痴れました。尼僧は言われた

とおり忠実に先端から長い竿を経て金玉のある根本まで、ジト〜〜…♡とゆつくり

舐め渡します。その快感ときたら、自分でシゴくオナニーの比ではありません。

「おお♡おお♡シ、シスタアア♡きもひいよううう♡」

赤ちゃんのように鳴くエルフ。

フレヤは不思議な味わいのある肉棒を、丹念に舐めつつ、自分も賞味していました。

（あは……♥ 変わったお味……♥ しよっぱいような…臭いような…でも美味しい……♥）

自覚していませんが、フレヤの舌遣いはかなりのものでした。

筋に沿って舐めるのはもちろん、カリ裏の襞から、肉棒の表面を滑らかな舌でまんべんなく舐め上げ、ヌラヌラと唾液を塗ってゆくのです。

「ああああ♥か、皮剥いてええ♥先っぽの皮剥いて…亀頭舐めてえええ♥」

だんだん大胆な要求をするエルフ。

フレヤは口を先端へ持つてきて、

（皮とはコレのことでしょうか）

両手で怒張を握り、そつと皮を引っ張ります。そうすると被っていた仮性包莖が徐々に下がり、その下から禍々しい亀頭が露わになりました。赤黒く、エラが張っていて、獣のごとき迫力があります。

「こ、ここを舐めるのですね…」

ドキドキしながらフレヤは舌先を伸ばし、軽く亀頭の頭を舐めました。

「!っあああ♥」

クリルがビクン!と震えます。

フレヤの舌が亀の頭をヌロヌロと舐め、唾液でテカラせつつ、その裏の縦筋をほじくります。カリ裏に白い粉のようなモノが付着していて、そこから凄い悪臭が漏れていました。

(イカ臭いのはコレが原因なのですね。舐め取ってさしあげましょう)

「♥ん~~~~♥んっ、んん~~~~♥」

ペロペロ…クチャクチャ…

ペニスを生やしたものの、男の性処理をよく知らないクリルがカリ裏の手入れを怠ったおかげで、そこには恥垢が溜まっていました。フレヤは嫌がることもなく、熱心に舌先を



すぼめてチンカスを取り除きました。白い粒々が可愛らしい舌でこそげ落とされるのは、なんとも淫靡な眺めです。

「あひい♥先っぽ気持ちいい♥チンカス食べてええ♥」

自分でもナニを言っているのか分からない女戦士は、冷静なら絶対に口にしないことを頼んでしまいます。

ナニも知らない尼僧は、そのカスを口の中に含み、食べてしまいました。可愛い唇の間からニチャ…クチャツ…と音が漏れ、ゴクツと飲み込みました。

(…妙なお味ですが、嫌いではありません…♥)

それどころか、汚いチンカスを食べたという事実には、尼僧の興奮度はまた1ランク上がっていました。次第に彼女の体の奥で、欲情の炎が着火されようとしていたのです。

(ここもきれいにしなくては…)

剥けた亀頭は尼僧の唾液でテラテラと輝き、尿道口が小さく開いて、透明なねつとりした先走り液が浮かんでいました。

フレヤは唇を開いて、軽く亀頭へ被せました。

カポッ…♥

「!んくつ、」

ピクンッ、とクリルの腰が浮きます。

「あほっ…♥ん、ズズッ…♥」

カウパー液を啜り、それから舌先を丸めて鈴口の割れ目に沿ってヌチュ♥ヌチヨ♥と、とても尼僧のお口から出るとは思えない、はしたない音を立てつつ、撫で撫でしたのです。

「!んんん♥も、もうらめえええ♥出すっ♥セーエキ出るっ♥尼僧さんの顔汚し  
ちやううう♥」

ググッ…!

凶悪な気配が腰の辺りから放たれます。

フレヤはとつきに口を大きく開き、亀頭をカッポリと含んでしまいました。

「♡ひひひひひん♡」

—— ドピュドピュッ！ ドプルルルッ！ ドピュウ~~~~~ッ！

「!?!? んぐう!?!?」

凄い勢いで飛び出した精液が尼僧の喉奥を直撃し、食道を伝い落ちました。生臭い匂いが口いっぱいに広がり、ドロドロした粘液が口の中を満たしてしまいます。

けれどもフレヤは口を離そうとせず、健気にも大量の白濁液を喉を鳴らして飲んでいました。

「♡んごくっ♡ごくっ♡ぎゅ…っ♡」

思いがけないご奉仕と、生まれて初めて口で精飲してもらったクリルは、亀頭が溶けそうな衝撃に舌を出してヨガってしまいました。

「♥あひつ♥あへつ♥あへええええ♥」

こうなると女戦士も形無しです。日頃の凛々しい姿など消し飛び、今はただ快楽に悶える女に還つてしまうのです。

「んぐつ…！んっ♥こくっ♥こく…っ♥…っはあ、はあ、はあ…♥」

一瞬むせかえりそうになり、かろうじてこらえると、フレヤはとうとう一滴残らず飲み干してしまいました。あまりの量に逆流した白濁液が、鼻の穴から細く白い筋となってツツツと垂れてしまいます。

「に、尼僧さん…だ、大丈夫か…？」

向こうからクリルの心配そうな声がくぐもって聞こえました。

「けほつ、…はい、なんとか…」

「わざわざ飲まずともよいのに…」

「いえ…そのう、もつたないと思ひまして」

「もつたない…」

意外な言葉に戸惑うエルフ。

「それに…不快ではありませんでしたわ、クリル様の精液…♥」

「!そ、そうか?ならよいのだが…」

「…でも、萎えませんか。クリル様のオチンポ」

そのとおりでした。

あれだけ射精したというのに、相変わらず極太チンポはビインと上を向いたまま。なおいつそう勢いを増した感さえあります。

ズキッ、ズキッ…♥フレヤの腰の辺りにむず痒さが生じました。

(…不思議です。このオチンポを見てみると、胸がキュン♥としてしまいます)

頬が紅潮し、今まで感じたことのない感覚がお腹の…もつとはつきり言えば子宮から生まれてきました。

「はう…♥」

フレヤは無意識に色つぼいたため息を吐き、慌てて手で口を押さえました。

(わ、わたくしつたら、なんてはしたない…)

\*\*\*

これで2回射精したものの、勃起は一向に治りません。女戦士の性欲は治るどころか、かえって煽られた感がありました。

(ぐぐつ…フレヤ殿にシテもらったというのに、ムズムズが止まらない。まだまだ続けたいが、さすがに…)

「それでは、お次はナニをいたしましょう？」

「——えっ!？」

クリルは驚いて二の句が継げませんでした。

聖職者へ白濁液をぶつかるといふ不敬な行爲をしたというに、ペニスを舐められたうえチンカスまで取ってもらったのです。普通は怒られるか、不敬罪で磔はりつけになりかねません。

けれどもフレヤは実に明るく言ったものですから、耳を疑ったのでした。

「し、しかし、ずいぶん不埒な真似をしてしまっているが…」

「でもクリル様のオチンポはまだまだお硬いまま…このまま放置してはお辛いのでは」

「それはそうだが…」

（うゝむ、困った。これ以上迷惑を掛けるわけには…かといつてコレは鉄の棒のように硬くなっているし、たぶんかなり射精ださなければ小さくなるまい）

などと女戦士が悩んでいると、尼僧は再び勃起を握りました。

「——うっ♡」

エルフの腰がピクン♡と動きます。体は正直なのです。

仕方なく女戦士は、ためらいがちに言いました。

「実は…もつと沢山、前からヤッてみたかったことが…」

「はい」

「その…フェ、フェラチオをいうのをご存知か」

「ふえらちお？」

「うむ。ペニスを食べるのだ」

「ええ！？オ、オチンポを？」

「正しくは、ペニスを口に含んで、舌で舐めたり、吸ったり、シゴいたりして、気持ちよくするとうい…」

「——こうれふは？」

——カポン♡  
「カポン♡」

「おおおつ♡  
」

エルフがエビ反りました。ビクン！と亀頭が尼僧の口中で跳ねます。

「んほ…お」

顎をいっばいに開いてフレヤは懸命にペニスを飲み込もうとしました。



(あふおが…外れふおう…)

とはいえ、直径があまりにも大きく、人間の口では到底無理。亀頭を口に含むだけで精一杯です。馬並みのサイズはどう考えても飲み込めない代物しょうもの。

—— その時、不思議な事が起こりました。

…ズルズルズルツ♥♥♥

「!? んんんんっ!??」

「おあああああ、そつ、それえええんん♥」

エルフ戦士が喚おめきました。

なんと、直径5センチ以上のペニスゆうゆうが、悠々と尼僧の口へ飲み込まれてしまったのです。信じられない光景でした。

「あふ…♥」



ジュルルッ♡

ハア♡

んむっ♡

ジュポポ♡

んしっ♡

んふ♡

ジュルルッ♡

ジュポポ♡



ズツ、ズブズブズブツ!!!

30センチ以上はあろうかというペニスが口中へ埋め込まれました。

物理法則を完全に無視して、本来ならあり得ない現象が起こったのです。口腔のサイズを超えた男根が収まり、咽頭いんちゆうを突破して、食道まで達します。女神が授けた魔法のペニスは不思議な快楽を与えられるモノなのでした。

気管を塞がれたのに、フレヤは息苦しさを感じませんでした。そのかわり、口から喉全体に凄まじい異物感があり、ズルルツ、ズルルツ、とそれが前後に動くのです。吐き気を覚えそうなところですが、なぜか反対に腰の疼きはますます膨れ上がりました。

「おほっ ♡おほっ ♡おほっ ♡おほっ ♡」

ズブツ ♡ズチョツ ♡ズボツ ♡

自然と腰が動き出し、ピタツ ♡ピタツ ♡と唇へぶつかります。そのたびに濡れた極太ペニスが可愛らしい口唇からヌヌヌツと吐き出され、突っ込まれました。

「んぼぼぼっ ♥ おぼっ ♥ んぶぶぶぶう ♥」

異音を立てながら尼僧も首を振り始めます。唇の隙間から唾液と先走り液が漏れ出し、顎を伝って床へ滴り落ちました。

(美味しい ♥ おいしい ♥ おいひい ♥ …)

頭の中でうわ言がグルグル踊っています。口中をゴリゴリ削るペニスの感触に、フレヤはすっかり夢中になってしまいました。

「はあっ ♥ はあっ ♥ 尼僧さんっ ♥ 尼僧さあん ♥ も、もう出るっ、出ちゃうのっ、飲んでっ、セーエキ飲んでえええ ♥」

叫びながら腰を打ち付けるエルフ。そして、

—— ドプドプドプツツ！！！！！！ ドププウウウウウ！！

「あやややややや ♥♥♥♥」

奇妙な雄叫びを上げ、女戦士は尼僧の口の中へ思い切り子種汁を吐き出しました。ドクツ♥ドクツ♥と放出するたびに肉棒が脈打ち、膨れ上がります。食道へ大量の白濁液が再び流れ落ち、胃袋へ収められました。

「んふっ♥んふ♥んふう〜ん…♥」

フレヤは必死で精液を飲み干しました。それと同時に、股の間の谷間が初めてジワツツと湿り気を帯びます。陰唇がわずかに開いて、白濁した分泌液がトロリと漏れ出したのでした。

「♥はひっ♥はへっ♥…もっ、もっろシたい…♥」

エルフの目がうつろになりました。あまりの愉悦に理性が吹き飛んでしまったのです。両手が自動的に上がり、窓越しに尼僧の頭を掴むと、まだ啜えたままの状態から、

——ズボツツツ！

「おぶっ！！？」

ズボツズボツズボツ!!

「んぶるっ! おぶるっ! んぶぶううう!!!!」

ズドツッ!ズドツッ!ズドツッ!!!

鷲掴みに頭を固定し、激しく腰を叩きつけます。もう遠慮する気分も吹き飛んで、本能のまま尼僧の口中を犯しました。

「あへっ♥こえがっ♥イマラチオっ♥いまらちっ♥ちっ♥に、尼僧さんのクチ便器っ♥最高お♥クチマンコッ♥♥おほっ♥べんきつつ♥♥♥」

恥ずかしい言葉を叫びながら一心不乱に尻を動かし、半眼になって、だらしなく口を開きました。

股間の先から伸びるクリペニスは柔肉の中をズルズルと底まで飲み込まれるようです。信じられないことに、これほどの長さの肉棒が根元まで埋まっていました。尼僧の喉の形がペニスによって盛り上がり、蠢いています。グロテスクなほど卑猥な眺めでした。

「んっ♥ぐっ♥をつ♥ほっ♥ぼっ♥ぢゅっ♥ぶっ♥むっ♥ごっ♥…」

巨大なペニスで口を塞がれ、唇のわずかな隙間から尼僧のえづき声が漏れてきます。ユサユサと乱暴に頭を揺さぶられ、フレヤは半ば失神していました。

腰で叩かれるたびに唇がブヂェル♥と潰れ、ほとんど胃に達するまで太いモノが体内へ差し込まれるのが分かります。本来なら息もできない体勢で、口便器と化した彼女は、ひたすら口内を陵辱りやうじやくされるのでした。

瞳が上向いて白目を剥く尼僧さん。

(♥おほお♥エルフさんにつ♥犯されてるっ♥お口にオチンポ突っ込まれてっ♥便器にされてますう♥)

それなのに子宮はどんどん熱くなり、股間のシミは広がってゆきました。

乱暴な中にもエルフの動きにはなんともいえない柔らかさがあり、ただ挿入さしこめるだけではない、繊細な振動を与えています。それがフレヤの口腔へ甘美なバイブレーションとなつて伝わるのでした。



女戦士のワイルドな仕草が、かえって処女おぼこの彼女に新鮮な刺激を与え、性的な経験が全くない少女へたまらない悦びになったのです。

ビタン！ビタン！！ビタンッ！！！

「♥おむふつ♥をうつ♥んぶぶつ♥おぶぶつ♥」

「♥はあつ♥はあつ♥はあつ♥ひあつ♥」

唇が平たくなるのではないかと思うほど腰を叩きつけ、ふたりのイマラチオは狭苦しい懺悔室の中を熱気で充しました。すでに先ほどの射精でイカ臭い匂いが充満し、そのうえ汗と分泌液の酸っぱい匂いまで混ざって、霽もやになるほど。

「♥ああああ♥出るつつつ♥また出るつつ♥また出すううう♥尼僧さんのクチマンコにiiiiii♥♥♥♥」

—— ビュルルルッ！ビュルルルルッ！！ビュビュビュウウウウウウウ！！！！

「♥ あへえええええええええ♥♥♥♥」

ビクンッ！ビクンッ！ビクンッ！

腰が激しく痙攣しました。

根元まで埋まった下腹部を押しつけつつ、両手で尼僧の後頭部をガツチリ押さえ、一滴も漏らさず注ごと拘束します。エルフの女戦士はだらしのない顔で喘ぎつつ、凄まじい快感に背筋がゾクゾクしていました。

プシャッ：女の部分から小水が漏れ出ます。こちらの方もすでに大洪水で、先ほどから白く濁った分泌液をタラタラと流し、太股を伝ってブーツへ入り込んでいました。

「♥はひい♥はへえ♥もうらめ♥こ…こんらの気もひ良ひゆぎう…♥」

とうとう腰の力が抜け、立っていられなくなります。後ろへよろめいたエルフは、ベンチへ倒れ込み、その拍子に長大なチンポが一気に引き抜かれました。

ズルズルズルルルッ！！！！

「♥おぼっ♥げろろろっ♥」

いきなり口腔を塞いでいたモノがなくなり、開いた口から白濁液が吐き戻されました。大部分は胃腸へ収まったのですが、何百CCもの精液が注入されたとあつては、さすがに一部は逆流したのです。

鼻の穴と口から白く濁った粘液が尼僧の顔から垂れるさまは、ひどく隠微いんびな眺めでした。プウツ…と鼻から小さな提灯ちようちんが膨らみます。

尼僧の方も激烈なイマラチオのショックで、床へへたり込んでいました。

お腹は微かに膨らみ、胃もたれするほど重くなっています。

それなのに、内股で八の字に開いた太股の間から、薄うすつすらとオシッコが漏れていました。射精の刺激があまりにも強かったので、軽いアクメを迎えてしまったのです。生まれて初めてアクメを感じた尼僧さんは、小刻みに震えていました。

（嗚呼、神よ…わたくし、とつてもはしたないことをしてしまいました…それなのに…と  
ても気持ちイイのです♥…これは罪なのでしょうか…？）

4・おっぱいはいやらし…じゃなくて、癒し♥

「……はあつ、はあつ、はあつ、はあつ……」

「……ふうつ、ふうつ、ふうつ、ふうつ……」

ふたりはしばし休憩を取りました。

お互いベンチに座って、今のプレイの余韻に浸ひたっています。

腰が砕け、力の入らない太股をだらしなく開いて、喘あえいでいました。

懺悔室の中はねっとりした空気に満たされ、それを嗅ぐだけで妖しい気分させられます。

(…なんとということだ。フェラチオなるものがこんなにイイものだなんて…それに、シスターに大変なことを…)

聖職者をイマラチオするという、とんでもない行為におの慄くのですが、一方で、彼女の口中にたまらない愉悅を感じてしまったのも事実です。

彼女のクリペニスフェラチオで口内射精した後、わずかにしほ萎みましたが、今はまた勢いを取り戻しています。背後の壁に寄り掛かるクリルへ、振り返った怒張が睨み、彼女の乳房の間に挟まれています。

(今までより大きくなっている。とんでもないチンポだな…いつたいエローラ様はナニを考えておられるのやら)

授かったモノの威力に恐怖さえ覚えてしまいます。

ですが、女では知り得ない快感もまたあるのだと知ったのです。

しかも常人を遙かに超えるサイズと射精量…。

これほどの絶倫巨根なら、なるほど、強くもなりましょう。

（男の悦びを知ってしまった今、後戻りできるのだろうか。女の悦びさえよく知らないのに…嗚呼<sup>ああ</sup>、でも、セックスしたい…このチンコをマンコにぶち込んで、思いつき突き刺したい…妄想が膨らんで頭がおかしくなりそうだ……！）

「——クリル様…」

カーテンの向こうからフレヤの声がしました。

エルフはギクツとしました。

（ま、まさか、正気に戻って断罪されるのでは…？）

「な、なんだ？」

「あの…オチンポは、鎮まりましたでしょうか」

一瞬「そうだ」と答えそうになって、クリルはためらいました。これ以上尼僧に迷惑は掛けられない…けれど、勃起したままでは誤魔化<sup>ごまか</sup>しようがありません。すぐバレる嘘もつげず、仕方なく答えます。

「…いや、まだ硬い。というか、前よりも大きくなっている」

「ええ…?」

「すまない。あれだけ尽くしてくれたのに…きつと、あまりに気持ちが悪過ぎたのだらう」

「そ、そうなのですか？ わたくしの口便器がお役に立てたのですね？」

「い、いや、それはつい口が滑ったのだ。決して便器などとは」

慌てて訂正するも、

「うれしい…誰かに気持ちよくなってもらえるなんて、初めて♥」

(うつ)

——— 純真すぎる… ———

あまりにも無垢な尼僧に、エルフは今彼女を見たら太陽のように眩しいだろうと思いましたが。

「それで、次はナニをいたしましょう?」



「はい？」

思わず間の抜けた声で答えています。

「『次』というのは…？」

「あのお話からしますと、もっと他にも色々なことをされたいのでは…な、ないかな？  
なんて…」

自分で言つて恥ずかしくなり、言葉を濁します。

女戦士は腕組みし、目をつむって考えました。その前を垂直に屹立した肉棒がブラブラ揺れています。

(…これはどうしたものだろう。これ以上冒瀆的なことをすれば神罰が下りはしないだろうか。それとも千載一遇の機会なのか…？)

「あの、わたくし、別にクリル様が不届きな真似をなされたとは少しも思っておりません。むしろあれほど沢山射精だされるのですから、さぞや今までお辛かったですよと…。

ですから、わたくしにできることであれば何でもいたします。決して軽蔑などいたしません。ご遠慮なくおっしゃってくださいませ」

(うつ。……)

ズキン

股間の逸物がビクツと揺れます。

そして、今の言葉がふたなりエルフのハートを射抜きました。

「——なんでもとは…誠か？」

「はい」

「だが、そのう、かなり、いやらしいことも含まれているのだが…」

「どうぞよしなに」

「うむ…」

腰の疼きは次第に高まってきています。

ついに女戦士は決意しました。

「そ、それでは…それほどまでに申されるのであれば、足蹴あしげにするのも不敬。もし願いを聞き届けてくれたら、幾重いくえにも感謝する。だが、無理はなされるな。嫌だと思つたら正直に言つてくれ」

(まあ、紳士で…いえ、淑女でしたわ)

「大丈夫です。このフレヤ、きつと貴女の悩みを受け止めてみせます♥ さあ、では、お次は？」

「ならば…胸を見せていただきたい」

\*\*\*

「こ、これでよろしいでしょうか…」

「—— おおっ♥」

クリルは思わず声を上げていました。

目の前に、ドーン！と音がしそうなほど、大きなおっぱいが横たわっています。

カーテンを引いて窓の向こうから突き出されたそれは、ひとつひとつがスイカ大の大きさをした巨乳…いいえ、爆乳でした。

どう見ても胸囲100センチは超えています。サイズはH、下手をするとIカップになるでしょう。

クリルも巨乳を自認していますが、それでもせいぜい90センチのGカップ。尼僧の爆乳には遠くおよびません。

「…すばらしい…見事だ…♥なんとという大きさ…しかも、ただ大きいだけではなく、美しく、それでいていやらしい雰囲気もある。形がこれほど整っているのは、さぞかし胸筋が丈夫なのだろう。乳首は乳房に比して小さめで、ほんのり桜色。大変可愛らしい。まだ色素が定着しておらず、黒ずんでいない乙女の乳首。さぞや汗疹あせもに悩まされているのだろうが、下腹を見るにお手入れも完璧。まさに女神の美乳…♥」

「あの…もうその辺で…」

感激のあまり滔々とうとうとまくしたてる女戦士。壁の向こうのフレヤは恥ずかしきあまり全身が火照ほてりました。かと言って、称賛しょうさんの声を浴びるのが不快だったわけではありません。

でも、小窓から乳房を突き出すなどという行為は、とても聖職者のすることとは思えませんでした。

(…誓いを立てた以上、お断りすることはできませんが…まさかこれほど恥ずかしい格好をしてしまうとは…わたくし、はしたない女ですね…)

ハッとクリルは我に返りました。

「あ。し、失礼。つい興奮して…この体になってからというもの、自然と女体にょたいへ目がいつてしまうようになって。乳比べをしてしまうのだ」

「わたくし、この胸はあまり好きではありません。その、大きすぎて、地面がよく見えないのでつまづくし、殿方ばかりでなく女性の視線も集めてしまうので…この静かな所へ来るまでは気の休まる暇もございませんでした」

「ほう…そんな苦勞が。だが、これほどすばらしいお乳なのに、胸の内に秘めておくのもつたない。貴女が嫌でなければ、ぜひ触らせて欲しいのだが…」

「はい…クリル様なら。どうかご存分に。このいやらしい胸が慰めになるのでしたら」

「それではお言葉に甘えて…♥」

(製品版へつづく♥)